

平成23年度 第1回山梨県考古博物館協議会議事録

- 1 日 時 平成23年11月16日(水) 午後1時30分～
- 2 場 所 考古博物館(風土記の丘研修センター)
- 3 出席者 (敬称略)
 - (委員) 堀内邦満、三井久美子、大隅清陽、谷口一夫、齊藤洋子、
鈴木郁子、廣瀬はるみ、佐藤ちか子、八巻良一、原 工 10名
 - (事務局) 金子館長、八巻次長、保坂学芸課長、学芸課員3名、総務課員2名
 - (教育庁) 学術文化財課員2名

4 会議次第

- (1) 開会
- (2) 会長あいさつ
- (3) 議事
- (4) その他
- (5) 閉会

5 会議に付した事案の件名

- (1) 平成23年度考古博物館経過事業について
- (2) 平成23年度考古博物館予定事業について
- (3) その他

6 議事の概要

○ 平成23年度経過事業に関する質疑等

(委員)

「縄文土器名宝展」は、土器の形状の違いなどがよく分かり、大変興味深い展示内容だと思う。多くの人に知っていただくことが必要である。

(委員)

昨年に比べ、インターシップが増加してよかった。NHKのイベントコマーシャルも内容がよかった。母親世代がよく見ていると思うので、効果的である。

(委員)

考古博物館周辺は素晴らしい景色で、太古の縄文人も同じ景色を眺めていたと想像できる。古代人の営みに思いをはせるよう、多くの人に訪れていただけるよう広報することが大切。

問題点として、考古博物館と埋蔵文化財センターの住所は同じでも、HPが別々で分かりにくいことがあげられる。例えば、同じ勾玉づくりの教室が重複して掲示されているなど、誤解が生じやすいのではないかと。

(委員)

考古博物館のありとあらゆる努力がよく分かる。広報にもよく取り組んでいると思う。

ただ、費用対効果をとるのが難しいのが現状であるが、もっと余裕がなければ取り組めないこ

ともある。

ボランティアを育てていくのも博物館の役割だと思う。また、県外の観光客の取り込みも今後もっと考えていくべきであろう。

現状でも十分健闘していると思うが、子どもに対しては体験メニューが効果的である。博物館という学術的な機関でありながら、イベントも同時に取り組むことは本当に大変だと思う。

(委員)

社会科の教員も多く利用させてもらっていてありがたい。

色々なイベントを行っているが、博物館は学術研究や、保存・保管が本来の機能であり、イベントを行って入館者の増を目指す理由、必然性はあるのか。

そもそもターゲットをどこに置いているのか疑問である。収入が目的なのか、観光が目的なのか。この目的によってイベントの中身も変わってくるのではないか。このような事情を是非教えていただきたい。

(委員)

今回の特別展「縄文土器名宝展」の来館者はマニアックな方が多いように感じる。そして、一度見たらもう一度見たいという人が多い。図録もよく売れている状況であり、多くの方に興味を持っていただいているようである。

テレビなどでの広報は、効果が大きい反面、直後は入館者が増えてもしばらくすると減ってしまい一過性で残念である。もう少し広報予算がとれないものか。または県の広報媒体をもっと利用できないものか。

また、聞くだけで施設に何があるのかイメージでき、かつ親しみやすい「愛称」を付ければ、館のPR効果が高まるのではないだろうか。

(委員)

東日本大震災の影響で一度落ち込んだ来館者数が、また増えた要因は何か。

県立美術館は指定管理者のSPSがセンスのいいチラシ等を作っている。他館のチラシに便乗して、隅に広告を入れるのもよいのではないか。

(委員)

本当によくやっていると、いつも感心する。

孫が小学生なので、考古博物館のイベントにいくつか参加させていただいた。

勾玉づくりなど、指導も親切で、アクセサリ並みの素晴らしい水準のものができた。よく企画されており、作ったものがきちんと使え、思い出として残ることが素晴らしい。これが次回も参加したいという動機付けにもなっている。

また収蔵庫の見学も子どもが喜んでいて、職員も大変だろうが、「行ってみたい」→「行って良かった」という良い循環ができてきたのではないか。

(委員)

平成23年度、小学校の指導要領が変わり、脱ゆとり教育になった。これにより縄文時代が教科書に復活した。中学校も来年4月から。正常化したと思うが、若い教員にすれば、教える量が増えてしまった。

考古博物館がどうして税金を使って維持されているのか。基本的には研究機関であり、学芸員を税金で雇い、研究成果をあげることが本来の役割である。イベントで入館者を増やすだけのものではない。

また、考古博物館と埋蔵文化財センターの関係を将来に向けて点検すべきである。一般の人は建物が同じ場所にあるので同じ施設ではないかと思う。将来的には組織を一元化する、広報を一元化するなど、検討するべきである。

県立博物館は、展示と研究機能を分けていない。博物館にも考古の研究者がいるがその違いはどうか、同じ山梨県の施設だが相当違う部分がある。

研究は税金を使ってやるのが相応しい。考古学もサイエンスである。こうしたことも含め、将来像を描いてアピールするべきである。

(事務局)

税金を取って利用する施設としては、どうしても費用対効果が問題となる。

他館と違い、考古博物館の入館料は安く設定され、学校利用は無料である。元を取ることはできないが、お金だけの問題ではないという点でご理解いただきたい。

学校利用については、学校現場において授業時間が増え、校外学習の時間がなかなか確保できないのが現状だと聞いている。

入館者を増やす取組みについては、公の施設である以上、住民福祉の向上のためにより多くの方に来館していただきたいという考え方に基づくもの。ただし、観光施設には馴染まないと思うので、古代山梨の姿を知ってもらうための学習施設としての機能を発揮したい。

また、調査研究結果を展示に結びつけたいと思うが、学芸員の数が少なく、やりくりが難しいということもお察しいただきたい。

広報については、世界からも広くアクセスできるHPが最も効果的な媒体であると考えている。

親しみやすい「愛称」についても、県立図書館が募集している例もあるので、検討してもよいのではないかと思う。

5月以降の入館者の増加要因については、県外の学校、特に東京近郊の学校の利用が増えており、学芸課のPR活動の成果だと思う。

他館のチラシ類に広告便乗するというのは、大変いいアイデアなので、今後の博物館の会議で提案したい。

(学術文化財課)

広報について、HP等で広報しているが、当課では4館まとめて博学連携という観点から活用をお願いを各学校にしている。特に、夏休みフリーパスポート等の時期には、職員が各学校に向いて行っている。また、県の広報誌やミュージアムインフォも積極的に活用している。

県教育委員会の整理では、博物館は歴史総合、考古博物館は考古総合という役割分担である。

考古博物館は、より詳しい考古学の情報を県民に知っていただく県立の施設として、非常に貴重な存在である。

単に来館者の増加ではなく、質も伴った展示（公開活用）と研究のよい循環を担保したうえで普及活動をやっていききたい。

(委員)

規模の小さい館は、大きい館にはかなわない。文化庁所管でも東博、京博、奈良博で内容が全く異なる。博物館といっても色々な使命をもったものがあると、ご認識いただきたい。

観光施設にはなじまないとの事務局の説明があったが、「歴史」などマニアックな人々が観光で訪れることを考えると、観光という点でも自信を持ってPRすることが必要である。

愛称の募集も人を寄せるためのイベントもやってよいと思う。必ず後に余韻が残るものである。学校利用においても、完全に理解できなかった子どもは、後日来館して理解を得ることもある。学芸員も多忙だと思うが、声をかけ、来館者を案内してあげるのもよい。愛情をもって来館者に

接することが肝要である。

(事務局)

考古博物館と埋蔵文化財センターの役割分担は、調査研究が埋蔵文化財センター、資料を保存活用するのが考古博物館である。

出前事業を多くやりすぎると、開発に伴う発掘調査が手薄になる可能性もある。大きく分けて、外に出るのが埋文、中にいるのが考古であり、車の両輪として機能している。

(委員)

広報だけでも一元化した方がよい。どちらに行けばいいのかという疑問が生じる。情報発信を一元化すると効率が良くなるので、この点をもう少し検討するべきである。